

CLANNAD ～汐風の物語～

ドラグニル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

岡崎朋也、そして古河渚…この二人はたくさんの苦難の末に永遠の愛を手にする。

そして二人の愛の証でもある娘…岡崎汐がこの世に誕生し、そこから15年…汐はついに高校一年生となる。

汐は私立光坂高校に入学し、そしてそこから彼女の出会いと別れの物語が始まるのであった…

目次

汐と風太と雅樹

「じゃあパパ、ママ！行ってきます！」

「行ってらっしゃい！」

パパとママの二人の声を聞いて私は元気よく自分の家を出る。私はついに念願の私立光坂高校に入学することができた。

高校一年生になって私は少しでも体の弱い自分を治そうと少しずつ運動をした。

その結果、今ではこの通り元気に育つことができた！

教室に入るとそこにうるさいのが一人いた。

「あ、汐ー!! 2日ぶり！」

「げ…春原…」

「げって何よー！」

そう言いながら私に不機嫌そうに見てくる彼女、春原潮は私の数少ない友達である。

見た目は茶髪のロングで前髪を左にヘアピンでしている。

流石にあの人の娘なのだからスタイルも良いと思ってたんだけど…この子は胸が…うん…まあ小さくても悪くはないしね…

でもやっぱりこの子…おれい○のあの主人公の京介の妹にしか見えない…

「ってそうじゃなくて…アンタさなんで毎回ウチの寮に来るわけ？なんなの好きなの？」

「そんなに嫌ならもう行かないよ？」

「ゴメンナサイ!! 来てください!! むさい男ばかりで嫌なの!!」

この通り…ちよつとアレだけどまあ悪いやつじゃない。

私とコイツが友達になった理由はこうだ…

『ねえねえ…消しゴム落ちたよ?』

『ありがとう！きみ…名前は？』

『…春原潮』

『春原塩？変な名前』

『字が違ーう!!潮だよ潮!!満潮の潮の方!!』

『あつそつちね…てつきりなんかの宣伝かと…』

『アンタ私の事なんだと思ってるの？』

『…バカ？』

これが私と春原の出会いである。

なんか思い出したら笑えてきた…パパ曰く春原のおじさんに娘がいたことに驚きだったらしい。

春原のおじさんは『え？知らなかったの？だつて聞かれなかったしなあー』と言っていたらしくパパも知らなかったらしい。

「でさー、汐って好きな人はいないの？」

「うーん今はまだいないかなー」

「えーいてるでしょ？一人や二人（笑）」

「うるさい便座カバー」

「ちよつ!!それはヤメテー!!」

何故彼女がここまで否定するのかと言うのはまた別の機会に話

そう…

「あ！二人ともおはよー」

「おはよう吉野くん」

「おはよう風ちゃん!!」

「わあっ!!」

私の駄親友は風ちゃんと呼ぶ彼を見ると直ぐに抱きつく。

彼は吉野風太くん、正直言つて友達？というか女友達に近い男の娘だ。…間違えた、男の子だ。

彼は母親に似てるらしくとても女の子らしい顔付きでもあまり背も高くない。

けど吉野くんのお母さんが言うにはやるときは凄いい頼りになるらしい。

「ちよつと…吉野くん嫌がっているでしょ？」

「えー？とか言って本当はアンタも抱きつきたいんじゃないの？」

「え!?!そんなんですか!?!…つてかいい加減離れてくださいよ！」

「えー、でもう…」

「でもじゃない、離れなよ春原…」

「ちえー」

全く！気を許すとこれなんだから…べ、別に吉野くんが嫌がっているから仕方なくであつて…て、なに心の中で一人で喋ってるんだらう…

「はーい！皆席についてー」

「きりーつ、礼、ちやくせーき！」

「それじゃあ今日は皆に転校生を発表する…」

転校生？てかまだこの学校来て一ヶ月しか経ってないんだけど

：

「はいってー」

「日坂花です！みんなどうぞ宜しくお願いします!!」

そこにいたのはとても顔の整ったスタイルの良い女子がいた。私は見た瞬間、綺麗な人というのはこういう人の事なんだろうと思つた。

長い黒髪に、スツとした綺麗な足、そして何より形のいいおつ

……危ない危ない…、まあとにかく綺麗な人である。

どうやら席が私の前だったらしく、顔を会わせることになった。

「よろしくね汐さん」

「へ？あ、ああよろしく日坂さん」

「アタシの名前は春原潮!!右斜め後ろだけどよろしく!」

「よろしく春原さん」



四時限目の授業のチャイムが鳴り終わると私はある場所に行った。

そこは演劇部、人数こそ少ないが皆私の友達であり、部活メンバ―だ。

「遅いわよ三人ともー」

「ごめんねー、吉野くんが居眠りしてて」

「風ちゃん…また居眠りしてたんだよー”授業中”に」

「ちよ…春原さん!!…よ、陽菜さん?」

「あ、アンタは何回注意したら気がすむんじやーい!!」

そう言うのと陽菜は吉野くん裸絞めをする。

陽菜…立川陽菜は緑髪のポニーテールでクラスでも色々クラブに誘われていたりする。

彼女曰く『運動部も文芸部もどちらか一個するのは嫌だ、だからその両方みたいな演劇部が一番良い』と訳の分からない事を言っ多数のクラブ勧誘を蹴ってここに来たらしい。

そして何より彼女は学年で…

一番の”巨乳”である

え?しょうもない?嫌々見たら分かると思うよ…だって…アレを見たら多分女子はショックを受けると思う。

あの貧乳とか言っても動じないあの春原が「私、当分牛乳を主食にする」とか言うぐらいだよ？

……ごめん、いつものことだった。

「あ、あの陽菜さん!!あ、当たっています!!」

「何がよー!」

「そうだよー当たってるよー」

「汐までなに?ってか何が当たってるのよ!」

こ、こいつ…折角吉野くんが言いすらそうにしてるから私がヒント与えてんのに。

「あらあら…そろそろ遊びはやめましょうね…陽菜さん」

「何言ってるんですか!宮沢先輩コイツは一回…」

「やめなさい」

「は、はい…」

流石は私達の部長でありリーダー格の人だ。

宮沢叶先輩はあの陽菜も一瞬で黙らすほどの力を持っている。

なんでも昔この学校にケンカをしに来た十数名の所謂ヤンキー?という人達を一人で倒したらしい。

そして何より普段こそ優しい先輩ではあるが、怒らせると止められるものは誰もいない。

見た目はお母さん似らしい…それと、叶という一文字で”かなえ”と呼ぶらしい。

「いい加減昼食を食べましょうっ!」

『はっ!』

これ以上誰も叶先輩に反論する人はいなかった。



「そういえばさー今日C組で転校生いたんでしよう?」

「そういえばそのようなこと言ってましたね」

「あ、はい、確か名前は…」

「日坂花でしたね」

「そうそう!!アタシさー演劇部に誘って見たんだけど断られちゃった」

そう…私達は日坂さんに演劇部に来ないかと誘ってみたのだがそれを聞いた瞬間、彼女は『それだけは絶対嫌です』と頑なに断られたのである。

その時の彼女はとても嫌な、というより悲しそうな顔をしていた。

「うーん…ヤバイですね…私達は今年で二年生です…まだ余裕はありませんがあと一人か二人一年生で欲しいところなのですが…」

「あー確かにそうですねー…」

叶先輩と陽菜は悩んでいるとバカがバカっぽく一人でバカな発言をする。

「だったらあと一人か二人誘えばいいんじゃないっすか?」

『……………』

「ちよっ!なんで皆そんな可哀想な目で見るの!?!」

「春原…アンタはよく頑張って考えた…だから後は保健室に行つて寝かせてもらいなさい」

「それどういう意味よ汐!!」

コイツはよく頑張った…バカなりに…大体もう入学式から一ヶ月だ一年生の皆はもう入りたいクラブに入っている。

だからその案は絶対がない。それに、帰宅部の人だってバイトとかただ単にクラブに入りたくないって人だっている。

それを分かってるから皆悩んでんのに…コイツは…

「ま、まあこの話はまた放課後にしましょう」

「そ、そうですね、じゃあ私達はこれで…」



——ここは何処だろう？今日の前にいるこの男の人は誰だろう？笑っている

そして何故あなたはそんなにも嬉しそうに私に手を差しのべるのだろうか？

『——』男の人が何かを言っている。声は聞こえず顔もよく分からない…けれども何故か彼の言っている言葉が理解できる。

『一緒に演劇やってみないかい？』

そんな風に聞こえる。

多分私はこの人のおかげで演劇を——

「…お…、きな…」

「う、…うーん…」

「汐!!もう放課後だよ?起きなよ」

「ご、ごめん、寝てた」

「珍しいですね岡崎さんが寝てるなんて」

「だよねー?なんの夢見てたの?」

「…なんだっけ?」

「アタシに聞いてどうすんのよ…」

…なんの夢見てたっけ？…まあいいや、早く演劇部の所にいこーつと…

でもそういえば私っていつから演劇が大好きになったんだっけ？

確か昔は見るのは好きだけどそんなにやりたいとまでは思わなかったと思うんだよね…

「さっさと行くよ汐」

「いこつ！岡崎さん!!」

「うん!!」



「……………」

あれって…

「おーい叶せんぱーい！陽菜！」

「きやあー！」

「うひやあー！」

え？なんでこんなに驚かれなきやいけないの？声かけたただけだよね？私

「な、なんだー汐さん達でしたか…」

「び、びつくりするじゃないの！」

「いやいや、ビックリしたのはこっちだから…」

「叶さんに陽菜いったいどうしたん？」

「そうですよ！どうしたんですか？」

春原と吉野くんが二人に聞くとその二人の指を指す方には…一

人の男の人がいた。

それはもう多分イケメンの部類に入るであろう男子学生が…

「貴方は…この今の場所が好きか？私は好きだ…何故ならどんなに風景や、場所が変わっていてもそこに自分の居場所があるのだから…」

…あれ？なんだろう…この感じ…知ってる、確かこの後は…

「街が変わっているのなら自分も変わればいい」

風景が変わっているのなら馴染むように自分も変われば良い…

「一番嫌なのは自分の——」

「居場所が無くなることなのだから…」

…あ、つつい教室に入っちゃった。

「驚いたな…君この物語を知っているのか？」

「うーん知ってるって言うよりここだけ何故かさつき思い出したって感じだけどね」

「君はもしかして——」

「ちよつとアンタ!!人の部室で何やってんのよ!!演劇したいなら演劇部に入りな!」

「え?ここは演劇部じゃないのか?」

「そうだよ!!だから…演劇していいのか…ゴメン」

…陽菜もたまにバカな気がする…ていうかこの男の人入部希望者かな?

それなら嬉しいかも!!よし善は急げ、だね!!

「ねえ君もしかして演劇部に入りたいの？」

「当たり前じゃないか」

「名前は？」

「風谷雅樹だ、よろしくな」

これが私と雅樹の出会いであった。

私は知らない、これより少し先にとてつもない出来事が起こることを…

私は知らない、本当の悲しみを…